



学校だより

6月号(第223号)
令和8年5月29日発行
横浜市立並木中央小学校

5月29日に思う

校長 齋藤 由美子

先日、本校の用務員から報告がありました。学校から出るプラごみを回収に来る業者さんが、昨今のビニル不足に配慮し、中身のごみだけを回収し、まだ使える外側の大きなビニルは、置いて行ってくれたとのこと。また違う日には、事務職員から、学校で使うビニルの大量発注は、問屋が受け付けていないということ。ナフサ不足！日本から遠い所で起きている紛争は、経済や産業、学校の活動にもじわじわと影響していることを感じます。

先日、みまもりかいのお二人の方に校長室に来ていただき、子どもの頃の戦争体験をお聞きしました。

お一人は、6歳の記憶…場所は大阪。B29が落とす焼夷弾の中を、道路に掘られた防空壕に逃げ込んだ。焼夷弾は、油の入った筒で、その油が燃えている建物に落とされると、中の油が飛び散り、さらに火が点き、辺り一面が火の海になる。その焼夷弾の油が母にかかり大変だった。焼け野原では、裸同然の人々。車の下には、帽子を顔に被せられたご遺体…。

もうお一人は、7歳、神戸での記憶…大人たちは消火訓練などで不在が多く、残された子どもたちは、6年生がリーダーとなってまとめてくれた。3月の夜に起きた対岸の空襲が、まるで花火のように見え、「また見たい！」と言うと、姉から、すごく叱られた。いつも年上の子どもが、年下の自分たちを守ってくれた。

お話をしてくださったお二人から、子どもたちに、メッセージを預かりました。

「戦争のときの6年生は、まるで親や先生のように自分たちの面倒を見てくれた。今の中央小のたてわりリーダーの6年生も、下学年に頼りにされているでしょう。平和な世の中でも、優しいリーダーに育ってほしい。」

「戦争は、市民の関係のないところで始まり、一旦始まると弱い者たちが巻き込まれる。みんなには、決して戦争を始める大人にはなってほしくない。」

横浜大空襲から81年目の5月29日。平和のありがたさを理解し、中央小の子どもだからこそ、言葉とコミュニケーションを大切にする気持ちをもってほしいと思います。小さな対話の積み重ねが、大きな紛争を防ぐことに繋がる一歩と信じています。